

2022年3月13日大齋節第2主日

創世記 15章 1-12, 17-18 節

フィリピの信徒への手紙 3章 17-4章 1 節

ルカによる福音書 13章 《22-30》, 31-35 節

大齋節第2主日となりました。今年の大齋プログラムは、「み言葉と歩む大齋節～黙想の手引き／教役者お薦めの書籍・映画～」を基にして行います。もう皆さまのお手元に届いていると思いますが、黙想と各教役者の方々が書いてくださっている文章を基にして、あらためてみ言葉から学びたいと思います。昨日は、聖アンデレ主教座聖堂で行われた執事按手式に出席いたしました。新たに二名の執事が誕生いたしました。「み言葉と歩む大齋節」にも聖職候補生として文章を掲載している方々です。新たに同労者が増えますこと、心強く思います。

さて、引き続き福音書は、「ルカによる福音書」です。本日の箇所は、二つの部分から構成されています。前半は、「狭い戸口から入りなさい」というイエス様の教えの部分です。後半は、イエス様が「エルサレムのために嘆く」お話です。このように主題だけを見ますと、これらの二つのお話のつながりがあまりないように思えます。しかし、「ルカによる福音書」の教えとしては、しっかりとつながっています。

「ルカによる福音書」において、キリスト者・教会は、新しいイスラエルです。新しいイスラエルと言っても、救いの優先権や既得権を持っているわけではありません。悔い改めて、今、イエス様の教えをしっかりと悟り、それぞれの行動の中に生かすこと、すなわち、狭い戸口から入っていることが大切です。また、その新しいイスラエルも、古いイスラエルと同じく、エルサレムを中心にして世界に広がります。それゆえに、古いイスラエルの中心・エルサレムへのイエス様の嘆きは、過去の出来事であると同時に、つねに現在の事柄でもあります。

まず前半部分から学んでいきますが、ここは、「狭い戸口から入りなさい」というイエス様の有名な教えが中心にあります。「**イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。**」（ルカ 13：22-23）とあります通り、イエス様が弟子たちと共に、ガリラヤ～サマリア～エルサレムという旅の途中でのお話です。「**すると、『主よ、救われる者は少ないのでしょうか』と言う人がいた**」（ルカ 13：23）とあるのですが、直訳しますと「ある人が彼（イエス様）に尋ねた」となり、イエス様に尋ねた人が誰であるかははっきりしていません。また、「**イエスは一同に言われた**」（ルカ 13：23）となっていますが、ここも直訳しますと、「彼（イエス様）は彼らに言った」となり、聞き手も「彼ら」ですから、はっきりしていません。それゆえに、聞き手は、弟子たちを含めてイエス様と行動を共にしているすべての人たちとなります。しかし、このように聞き手があいまいな場合は、語りの手法としては、読者である現代のわたしたち自身にも、このイエス様の言葉は向けられていると考えられます。

ここにあるイエス様の教えと、ほぼ同じ内容の言葉が「マタイによる福音書」

の山上の説教にあります。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」(マタイ 7: 13-14)」です。マタイの場合は、「狭い門」となっていますが、それは、キリスト者に律法学者に勝る義を求めており、つまり義を行うことであり、そのように義を行わなければ天の国には入れないという天国の門でもあります。

マタイにあるイエス様の言葉も厳しいのですが、ルカの「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」(ルカ 13: 24) は、それよりも厳しいと思います。マタイでは、「広い門」か「狭い門」かという二者択一ですが、ルカでは、「狭い戸口」の一択です。マタイの場合は、うっかりしていると「広い門」を選んでしまいます、ぐらいいも、感じられるのですが、ルカは「狭い戸口に入るように努めなさい」です。またその「努めなさい」という表現は、新しい「聖書協会共同訳」で別訳として「競い合いなさい」となっています。つまり単なる「努力」ではなく、「競い合う、奮闘する」ことをイエス様は命じているのです。この言葉の聞き手には、読者も入っているかもしれないと申しましたが、わたしたちも狭い戸口から入るように、日々奮闘を求められているといえるのです。

「ルカによる福音書」のイエス様が、このような厳しい言葉を語っているのは、ルカの特徴である「悔い改め」という概念が関係しています。すなわち、ルカの場合、「狭い戸口から入る」とは、悔い改めてイエスを信じることにほかならないのです。どんなに人間的に立派であっても、悔い改めてイエスを信じなければ、神の国は入れないという意味で、入れる人が少ないと語っているのです。また、「悔い改める」とことは、単に「心の持ち方を変える」という意味ではなく、行動全体を主なる神様の方へ変えることです。それゆえに、その実を結ぶことも大切です。そのことがイエス様の「そのとき、あなたがたは、『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言いだすだろう。」(ルカ 13: 26) という言葉も現れています。その意味では、このイエス様の教えは、教会に集められる人々も含めて、すべての人々に対しても向けていると思います。ただし、イエス様は、単に裁きを語っているのではありません。それはマタイも同じであると言えますが、イエス様が示しておられるのは、救いです。それゆえに、この部分は「そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」(ルカ 13: 29~30) と結ばれているのです。つまり、「東西南北」という空間を超えて、そして「先か後か」という時間も超えて集められるということです。すなわち、地上でのあらゆる事柄を超えて、神の国での宴会の席につく、天のエルサレムでの宴会の席につく、それがもっとも大切な目標であると教えておられるのです。

さて、その後 31 節から、「ちょうどそのとき」と話が続いていきます。「ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここを立ち去ってく

ださい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。』と、ファリサイ派の人々が、イエス様のことを心配するお話が続きます。ファリサイ派は、イエス様の代表的な敵対者といえますが、「ルカによる福音書」では、それ以外の側面もあります。イエス様と一緒に何度も食事をすることもあったからです（ルカ 7：36、11：37、14：1）。ファリサイ派の人々も、ヘロデ王に批判的であるという点では、イエス様と共通していたということ、ここは暗示しているのかもしれませんが。しかし、ここでのお話の中心は、ファリサイ派とイエス様との関係ではなく、イエス様のエルサレムに対する嘆きです。イエス様は、まず自分がエルサレム以外では死なないことを語りつつ、そのエルサレムが、「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」（ルカ 13：34）とある通り、何度も主なる神様の呼びかけにも応じなかったことを嘆きます。「だが、お前たちは応じようとしなかった」と訳されている最後の部位は、直訳すれば、「あなたがたは欲しなかった、望まなかった」となります。エルサレムの人々は、主なる神様の意思や愛を欲しなかったのです。イエス様は短くまとめて語っていますが、主なる神様の神殿のある、言い換えれば主なる神様が臨在される場所・エルサレムの歴史とは、なんども主なる神様が愛を示されたにもかかわらず、悔い改めて主なる神様を求めなかった歴史に他ならないのです。

悔い改めた人々が、神の国の宴会・天のエルサレムの宴会につくことと、イスラエルの中心地であるエルサレムに、悔い改めがなく救いがないことを嘆くこと、この二つの事柄をあわせて、「ルカによる福音書」は次のような事柄を伝えようとしています。冒頭で触れました通り、一つは、悔い改めてイエス様をキリストと信じたキリスト者・教会が、新しいイスラエルであるという神学です。もう一つは、新しいイスラエルであるからこそ、その宣教はエルサレムから始まり、その歩みは、エルサレムから始まり世界に広がるという世界観・歴史観です。わたしたちは、これらから言えば新しいイスラエルに属します。悔い改めて、イエス様をキリストと信じる信仰に入っている存在です。本日の話から言えば、狭い戸口から入った存在です。また、本日の「創世記」に「**アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。**」（創 15：6）という言葉があり、「信仰義認」という神学から言えば、現実的な行動に関係なく、信仰に立つからこそ義とされた存在であり、救いに至る存在です。しかし、同時に、今、イエス様のエルサレムへの嘆きを、どう捉えるかが問題となるのです。なぜならば、イエス様の時代も現在も、エルサレムは混乱の中にあるからです。そして、エルサレムだけではなく、世界中が、主なる神様の意志と愛とかけ離れた混乱の中にあるからです。悔い改めて信仰の歩み続けるわたしたちキリスト者・教会は、新しいイスラエルであり、天のエルサレムに住まいと救いがあります。しかし、「福音書」に書かれたイエス様の嘆きは、現在のわたしたちとまったく無関係ではないのです。わたしたちは、天のエルサレムが約束されているから、今のこの世

界の混乱を、ただ傍観していてよいということはないのです。なぜならば、イエス様は、現在のエルサレムの混乱を、そして世界の混乱を、今も嘆いておられるからです。

わたしは、「マルコによる福音書」を専門としておりますので、エルサレム中心に考えるルカの神学はあまり好きではありません。しかし、エルサレムという名前の起源は、諸説ありますが、意味深いのです。一つには平和の基礎、すなわち神の平和の基礎という説があります。そして、それは単に『聖書』の世界だけに通用する信仰的な意味だけではありません。実際に現実の世界でもそうではない場所でもあると思います。しかし、過去において、エルサレムは、何度も争いの場でした。現在も同じです。未来もそうなのか。もし、そうならば、その未来が変わるために、教会は歩み続けなければなりません。

そうはいっても、現在のエルサレムの混乱に、教会が、それがわたしたちの東京聖三一教会という意味でも、世界中の教会という意味でも、教会がすぐに何かができるわけでもありません。また、今行われている世界各地の戦いに対しても同じです。そう思う時、無力さを感じます。主なる神様が示され、イエス様を通してよりはっきりと示された愛を、わたしたちは知っているのですが、すぐに具体化できない状態にあるからです。しかし、わたしたちには祈りがあります。祈り続けることができます。エルサレムは、祈りの家でもあるからです（イザヤ 56：7）。

何を祈るのでしょうか。今行われている戦いについて、いろいろなメディアで、様々な人が様々な意見を傍観者的に語っています。わたし自身先週、攻められた方が、懸命に自分たちの大切な何かを守ろうとする姿に、強大な軍事力を持つ国の隣にいる、小さい国々の励ましになるかもしれない、というような主旨のことも語りました。しかし、主なる神様の意思と愛は、それらの人間のすべての思いを超えていると思います。それゆえ、わたしたちが祈るべきこととは、戦いを始めた方が、その誤りに気づき、戦いをやめ、反省すべき点を反省して、復興のために、努力することです。そして、攻め込まれた方も、憎しみや怒りを超えて、その反省を受け入れるということです。また、わたしたちを含めて、世界中の人々も、今起きている悲しみを自分とは無関係な事柄とせず、その復興のために力を合わせるということです。さらに、今強大な軍事力をもつ国が、今起きている悲しみから、自らの歩みを変え始めるということです。教会に集められるわたしたちは、天のエルサレムに住まいがあるという確信があるからこそ、そのような祈りができるのだと思います。

先日、わたしたちの信仰の先輩を天国に送りました。この世界での別れは、悲しい事柄です。悲しい事柄ですが、わたしたちはそれが天のエルサレムでの再開のしるしであることを確信しています。戦いがもたらした別れと悲しさとは異なるのです。主なる神様の平和がこの世界に実現することを、これからも熱心に祈り求めたいと思います。ことに、真の平和の実現のための、大きな鍵となっている、イエス様のご受難を深く学びたいと思います。